

うとしたのであろうが)。もう少し言い直せば、最初の四つの要因は寄生地主制の世界史的段階規定の面からする説明であるし、上からの資本主義は特殊日本的資本主義の型の面からの説明であるが、その二つの説明が充分統一されていないということである。

惣じて寄生地主制の二つの問題点のうち第一の問題については非常にすぐれた実証をされているが第二の問題についての実証がそれにくらべると弱いのが残念である。

以上本書についての私の疑問をいくつか述べてきたが、両氏の寄生地主制論の意義を一言にしていえば、多くの欠陥をもつにもかかわらず寄生地主制形成期にブルジョアの発展をみとめる立場からの、理論と実証をともなう一つの体系をもつた最初の寄生地主制論であるということにあるであろう。

両氏が今後研究をおしすすめ、この立場に立つ寄生地主制論を完成されることを期待しつつ私のつたない紹介と批評をおわることとしたい。(お茶の水書房発行 定価四五〇円)

——中村 哲——

山田憲太郎著

東西香薬史

本書は現在我国に於ける東西香薬史研究の権威者たる山田憲太郎博士が、これまでに著わされた関係諸論考を消化し、進展させて再凝固せられた成果に外ならない。

本書の構成は、I「緒論、香薬」II「古代泰西肉桂史」III「龍涎香史序説」IV「明治前

以下、一々の各篇について触れて行くこととする。

先ず、I、「緒論、香薬」では、歴史上の香薬について起源より説き起し、その使用に於ける用途(焚香料・調味料・化粧料)・意義について、従来の考え方を批判反省し、一層その理解を明確にされんとする。本篇の通説により、史上の香薬に関する概略の知見を得、後続各篇を読むための予備知識を与えられる。

「以上の各篇は一見独立して関連性が無いようであるが、東西両世界の香薬に対する歴史上の根本的な態度を知り、商品として存在した香薬の源流をはつきりしようとするもので、そこには一貫したつながりがある。」しかしてそこに取扱われる香薬は西南アジアの乳香・没薬・Labdanum・インドの胡椒・Costus・甘松香・Bdellium・東アジアの丁香・龍腦・沈香・麝香などであつて、世界の主要な香薬については殆んど網羅されている。本書が上掲の如き数篇の特殊な研究論文として存在価値をもつ所以である。

所で、著者によれば、香薬とは「香氣と味(刺激)のいずれかを主体として薬物上の効能を従とし、三者を兼ねるもの」を称するということであるが、この語の用法について一言したい。それは宋代の中國に於いて官に設けられた「香薬庫」では、「宋会要稿」や「宋史」などに徴せられる如く、必ずしも前記のような狭義の香薬に限らず、南海より輸入の犀象宝石の類をも取扱われて居り、この場合の「香薬」は前記の香薬よりも広義に解せられよう。尤もこれは特殊な例であるが、この場合に於いても、かかる広義に用いられていることより、逆に、香薬が当時の南海貿易に於いていかに圧倒的地位を占めていたかを

示す貴重な史料となし得よう。

Ⅱ、「古代泰西肉桂史」で考察の対象となる肉桂とは、「インド本土及びそれ以東のセイロン・ビルマ・マレイ諸島・インドシナ半島・中国と日本の南部などに亘つて広く生育する樟科系の種々の肉桂樹の樹皮と小枝を（或いは根と花・果実・葉などを）乾燥したものと及び樹皮と枝葉を水蒸気蒸溜した精油で、（中略）洋の東西を問わず古代より使用した主要な香薬である。」本篇ではその肉桂の古代オリエント・ギリシヤ・ローマへの伝播について、並びに其処での香薬使用全体的実際の姿を肉桂を通して解釈されようとしている。すなわち、Herodotus・Pining・Straboなど古代泰西の諸記録の記載とインド及び東アジアに於ける肉桂との関連的考察及び当時西方世界への香薬供給地として重要な地位を占めたアラビヤ南部紅海入口地帯に於ける古代民族の商業性とその境界の究明が主眼となつてゐる。

本篇は本書の pp. 33-188 に亘る長篇の故に、その内容を短言に尽すことは至難で、次にその目次を掲げて参考に資したいと思う。

第一章「アラビヤの肉桂」、(一)古代ギリシヤ

のシンナモンとカッシヤ、(二)アラビヤのサバ人の肉桂と東西の交通、(三)シンナモンとカッシヤの語源・類似品と用途、第二章「東アジアの肉桂」、(一)主要肉桂の分布とインドにおける使用年代と言葉、(二)セイロン肉桂は中世の末に現われる、(三)マレイ肉桂（カユ・マニス）とシナ肉桂（ダル・チニ）、第三章「東アフリカの肉桂」、(一)ソマリランドの肉桂地帯、(二)プトの肉桂。

なお、ダル・チニ(daru-chini)に関する中国文献の一として、筆者の被見した一記事を紹介したい。それは「島夷誌略」波新離(Ba-shin-ri)の条に貿易之貨として挙げられている「達刺斯離香」であるが、これについて藤田豊八博士は「達刺斯離不知何香」（島夷誌略校注）と云われ、本書の著者山田博士も前著「東亞香料史」で「島夷誌略」にシナ肉桂は勿論、インド・南洋の肉桂に就てすら言及せずとされているが、筆者はここに見えた「達刺斯離」をダル・チニの対音であろうと考へたい。その内容は、シナ肉桂ではなく、やはりインド産か或いは東南アジアの肉桂であったのであろうか。

Ⅲ、「龍涎香史序説」は、これまた先篇と

同様、かなりの長篇で pp. 189-312 に亘つてゐる。その記述は第一章「龍涎香の根源」、(一)アムバーグリスと龍涎香、(二)アラビヤ人とアムバー、第二章「龍涎香の伝播」、(一)龍涎香の中国到来、(二)龍涎嶼、(三)アムバーの転送、の順でなされているが、約言すれば次の如く云えよう。すなわち、七世紀以後のアラビヤ人によるインド洋発展により、東西両洋に知られた龍涎香について、その東方中国との關係を中国側史料との対比によつて考察し、中国に於ける龍涎香の用途は、主として焚香料の調合混和保香剤としてのみ認められるとされる。更に、龍涎香という一つの特殊商品の伝播経路を追求することにより、当時のインド洋通商の一面を実証しようとする。この間、香薬の東西伝播交流の研究に中国側史料の重要なことを強調され、従来欧米に於ける香薬史研究が多く西方史料に偏し、従つてその西漸のみが論究され、中国への伝播が考察されることが少なかったのを是正しようとしてゐる。

本篇で特に留意されるのは次の諸点であるか。(1)以前、著者が阿末香の名が「西陽雜俎」以外に中国は勿論日本の史料にも見えな

いから、それをアムバーと同一視することは不当であると解していたのを、本書では岡本良知氏説に従い、これをアムバーと見なし、前説を撤回されていること。(2)賈耽の道里記に見える「三蘭」について、藤田博士のセイロン説に反対し、これをNanz地方に比定されようとする。ただこの場合、地理的にはともかく、著者自身も述べられるように、三蘭という字首に適合する地名が見出せない難点が残る。(3)「嶺外代答」「諸蕃志」などの「麻囉拔」に「*Hirth, Rockhill* 両氏が *Hadhramaut* 沿岸の *Merbat* や *Aden* をも含む地帯と解したのに対し、藤田博士がこの説に疑問を提出されているが、著者は *Hirth, Rockhill* 両氏の説に賛成される。(4)この外、著者は龍の何々と称するものは、ほとんど南方系に属する珍物に限られているように見られているが、これは如何であろうか。中国の古典、例えば「周易」(卷十八説卦伝)では震為雷、為龍。とあり、その震について万物出乎震。震東方也。と見える所からすれば、中国では龍は東方に關連づけられ、必ずしも南方ではない。更に卑近な例では、甲骨が龍骨と称されて売買されたが、この場合も別に

南方と特殊な關連は認められないであろう。南方系の珍物を龍に關係づけて命名したのは、恐らく南海より渡来の商品は中国本土より見れば珍奇なもの、神秘的なものが多いであろうし、更に重要なものは、かかる珍異な商品の価格引上げのためにも龍に關連づけることが一層効果があつたためではあるまいか。IV、「明治前日本香料史」(pp. 33-47) 本編は、著者によれば、香薬各品の源流史ではなく、ある民族或いは國土より見た香薬史としての試論である。

第一章「仏教の匂い」、第二章「趣味の匂い」、第三章「香すなわち沈」、第四章「樟腦の製造と龍涎香」、第五章「現代の香料への構成から、大約本編の内容は想像されようが、日本における香薬の使用は、まずその傳來の初期即ち飛鳥・天平時代の寺院を中心として發展した焼香供養に始まつている。次いで平安時代に至ると焼香供養の盛行と共に、王朝宮廷人の趣味の薰物(ねり香)が樂まれた。鎌倉・室町時代には、多様な一面をもつ薰物の匂いから、平易で單純な沈香木に内在する香氣の美しさを探し求める様になつたが、平凡な中に非凡なものの存在を發見したこと

であり、「心的經驗の幽玄な思惟の助長にまで高められ」香薬使用に於ける一進歩を示したものと云えよう。唐南蛮朱印船時代には、所謂六國(伽羅・羅國・真那賀・真南蛮・寸門多羅・*佐曾羅*)と五味(甘・苦・辛・酸・鹹)の成立が見られ、ここに香道は大成した。次いで、これまで僧侶・貴族・武士と一部の階級の独占するところであつた香料が、漸次都市庶民の生活の対象となるに至つたが、その使用と發展には限界があつた。「かくて、匂い自体を自然の中にとけ込んだ姿で樂しみ識別し、或いは觀察しようとする考え方と態度には、香料と人間との対立意識に立つてこの対立を人間によつて克服しようとする考え方は生れることなく、香料を使用する技術と方法はある一定の限界以上には進歩しない。」従つて、西洋の新しい精油を中心とした香料の伝播に伴い、従來の我國で使用した香料は過去のものとならざるを得ない。これが昔の香料の迫る道であつたのである。以上は本編の全くの素描に過ぎない。しかしここにも亦、随所に重要な問題が提出されている。今その内の二・三について言及したい。(1)まず、伽羅と奇楠香との語について、

